

平成29年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

- I スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
 II マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
 III スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
 IV 日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
 V スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【 千葉県 】

1 実践テーマ	【 I・III・V 】
2 実施対象者	学校名 : 千葉市立 新宿中 学校 対象学年 : 2学年 クラス(人数): ABCD組女子(57人)
3 展開の形式	(1) 学校における活動 ① 教科名(体育科・保健体育科) ② 行事名() ③ その他() (2) 地域における活動 ① イベント名() ② その他()
4 目標 (ねらい)	モデル校での実践等を通して、体育・保健体育の学習を充実させ、子供たちが、よりスポーツを好きになり、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育み、健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図ることを目的とする。
5 取組内容	○車いすバスケットボール(全4時間) ・オリエンテーション ・車いす操作練習 ・イスに座った状態でのパス練習・シュート練習 ・ゲーム ・振り返り ※授業の開始時に映像資料を用いて、バスケットボールとの違いを視覚的に理解したり、車いすバスケットボールに興味をもてるようにしたりした。 ※ゴム素材のバスケットボール(軽量ソフト4号球)を使用し、怪我へ配慮したり、ボールの操作をしやすくしたりするように工夫をした。また、最終の授業では、中学女子で使用している6号球を使用してゲームを行い、実際の選手の様子を体験できるようにした。 ※イスに座った練習では、より下肢を使用できないように、足を地面から浮かせて練習を行った。 ※体育館半面の2コートで授業の展開をしたが、ゴールと壁との距離が近く、車いすに乗った生徒が壁に衝突する恐れがあるため、侵入禁止エリアをゴール手前に設定した。 ※授業の中盤では、攻撃側チームが数的有利な状況をゲームで作ることで、シュート後に速攻や空いているスペースに走り込むなど、ゲ

	<p>ームの展開の入れ替わりを早くし、より実践のゲームに近づけるようにした。</p>
6 主な成果	<ul style="list-style-type: none"> 第4時の展開、まとめでは、通常のバスケットボールを使用したり、車いすバスケットボールのルールを伝えたりすることを通して、選手たちの技能や体力の高さを実感し、パラスポーツへの興味をもつ生徒が増加した。 車いすに乗ることでバスケットボールの技能の高い生徒とそうでない生徒との技能差が埋まり、どの生徒も楽しんで授業に参加することができた。 移動スピードがゆっくりなため、ゴール型ゲームで求められる「空いたスペースを見付け、移動すること」ができた。
7実践において工夫した点 (事業の特色)	<ul style="list-style-type: none"> 映像資料を用いて、視覚的に興味をもてるようにした。 第2時の2対2のゲームでは、車いすの操作がうまくできない上にボール操作を加える難しさがある。そこで、運動量の確保とゲームの展開を早めるために、コート外側に車いすには乗らない生徒(ウイングマン)を2名ずつ配置し、車いすに乗った生徒の補助役とした。 第3時の3対2のゲームでは、攻撃側チームに数的有利の状況を作り、攻撃終了時にすぐに自陣に戻るようにし、ゲームの展開の入れ替わりを早くし、より実践のゲームに近づけるようにした。 第4時では、本来の車いすバスケットボールにより近づけるために、3対3でゲームを行い、ボールも中学生女子が使用する6号球のボールを使用した。
8主な課題等	<ul style="list-style-type: none"> 車いすの台数が10台と少なく、プレーしている生徒よりも待っている生徒が多く、運動量の確保がしにくかった。また、交代する際、車いすの乗り換えに時間がかかり、思うようにゲームに入れなかった。体育館のスペースから、安全面を考慮すると1コート3対3もしくは、4対3程度が限度と考えられるため、車いすの台数を増やすことでは、解消できないと考えられる。 車いす10台を施錠できる場所に管理・保管することが、大変である。また、タイヤの着脱、タイヤの空気圧の点検、車いすの搬出入など、かなり煩雑であり、準備・片付けに時間を必要とする。
9来年度以降の実施予定	<ul style="list-style-type: none"> 今回行うにあたり、ゴムボールを準備していただいたことで、スムーズに実施することができた。 授業導入の種目練習をサーキットトレーニングなどで実施し、運動量の確保しつつ、車いすバスケットボールの技能に近づけるようにしていくのが良いと考える。 現段階では次年度の実施については検討中である。